

自然を語る会 (DVD 鑑賞)

日時：2019 年 1 月 19 日(土) 10:00-12:00

場所：飯田橋市民ボランティアセンター

担当：柳澤征克さん

参加者：10 名

NHK プロフェッショナル 仕事の流儀 (放送：2017.3.13)

しげあつ

『それでも、海を信じている カキ養殖・畠山重篤』

新年初の定例会は読書会に代えて DVD を鑑賞。

長年カキ養殖を営む畠山さんは、海の生態系と森との深いつながり…「森は海の恋人」…の信念で、1989 年以来、地元の漁師の方々から全市民レベルの植林活動を続けており、その結果は証明済みである。

しかし 2011 年 3 月 11 日東日本大地震が発生し、太平洋岸各地大津波が襲い、気仙沼（宮城県北東部）でカキ養殖を営む畠山さんも、漁師仲間たちも生活手段のすべてを失ったが、驚

くべき遅しさと速さで驚異のカキ復活を遂げるのである。カキ養殖復活にかけた畠山重篤さんしげあつの仕事や生き方などを学ぶ機会を、柳澤さんが今日の DVD 勉強会で実行して下さった。映写（45 分）に先立ち、背景の知識…主人公のプロフィール（経歴、社会的活動、数々の著作と受賞歴）、現地（地理）など充実した自作の資料により説明後 DVD を映写。

311 地震/津波で最も被害を受けた地域の一つが、カキ養殖場のある宮城県気仙沼湾/舞根湾もうね 一帯である。沖を大島がふさぎ海面は静か、栄養豊富な水が流れる汽水域で、海底ふかい、絶好の漁師町であった。そこを大津波が襲い、住居も作業場も船も道具も、根こそぎ流され、残ったのは瓦礫と、泥や油まみれで生き物が消えた海だけ。

「それでも、海を信じてる」 震災直後から NHK 取材陣が 8 ヶ月間、カキの復活に挑む畠山重篤さんと息子等に密着取材をした。

殻が閉まらないほど大粒で、濃厚なうま味、最高品質のカキ復活のため、ゼロスタートする重篤さんとご子息。…瓦礫の片づけ、船や作業場や漁具、カキ筏作り、(産卵用の)種ガキ探し、ホタテの殻を使う採苗準備、採卵タイミングの見極め等々仕事は山積みのゼロスタート。稚貝の成長確認、ワイヤーでつなげたカキを人力で船上に引き上げ成長を確認するのも収穫(漁獲)も酷寒の海上での重労働だろう。被災後たった 1 年足らずで、往時の立派なカキ復活の見通しが立つ。やがて収穫量も回復していこう。

壊滅状況から、元の豊かな海への急速な回復を解くカギは、1989 年以来 28 年も継続してきた植林の効果である。落葉広葉樹(ブナ、ナラ等)の森が、海に栄養をそそいだからである。

森の落ち葉と微生物がつくる腐葉土。腐葉土の中で生成された「フルボ酸」が地中に浸透し、地下水により川を流れる途中、鉄分を結合し「フルボ酸鉄」となって海へと運ばれる。フルボ酸鉄は植物プランクトンの必須の栄養分である。このことは学者、研究者が解明してくれた。

豊かな海は食物連鎖の底辺にいる植物プランクトンから始まる。
植物プランクトンの必須の鉄分が「フルボ酸鉄」、その元は森落ち葉なり。

畠山重篤さんは1943年（上海）生まれ、半世紀にわたる養殖実践の過程で、実が赤い「血ガキ」に遭遇する。汚れた潮が原因だろうが、対処方法を求めてロアール川河口にあるフランスの有名なカキ産地を訪れたが、ロアール川は延森の間を延々と流れ下る。森と海の関係等、学問的な探求心も旺盛で学者研究者とも連携を絶やさない。1970年頃～1980年代は土地開発、工業化が進み、都市も過密化した。山は荒れ、海は赤潮の時代である。カキ不作の原因は荒れた森だと判断した畠山さんのすごいのは、仲間を集めて、森の再生に率先着手したことだ。植林などカキと関係あるのかと思われるのが普通だろう。植林の効果など50年、100年先のことだろう。着手出来ても、継続するのがさらに困難でないか。どうしてそれが出来たのか？意志の力に加えて、畠山さんの人間性（やさしさ）、自然を思う心であろう。畠山さんは全国の小中学生を招き、カキ養殖体験させており、3000人以上がこれまでに畠山さんの養殖場を訪れたそうだ。「自分一人でよいカキは育たない。舞根湾^{もうね}だけでなく、川の流れる流域、森の広がる山域、すべての人たちの気持ちがカキには凝縮される」と語る畠山さんは人の心にも木を植えてくださる素敵の人だ。

柳澤さんは楽しい勉強と気づきの場を用意してくれた。終了後ランチタイムも会話が尽きなかった。
(岩淵記)

